

## 近現代史の授業教材としての万国博覧会の考察

### Discussion of Teaching about World Expositions in Modern and Contemporary History Classes

国際・教養教育センター

小川 正人

OGAWA, Masato

Center for International and Liberal Arts Education

**要旨：**2018年3月に告示された新しい高等学校学習指導要領によって、2022年度から地理歴史科において、近現代史を中心とした日本史と世界史の融合科目である「歴史総合」が実施される。本稿では「歴史総合」の観点である「近代化」「大衆化」「グローバル化」のショーケースともいえる万国博覧会の170年以上の歴史を紐解きながら、「歴史総合」授業における万博の活用を含めた内容構成を示唆する導きを目的とする。

**Abstract：**The new social studies subject “Integrated History” will be introduced to high school students in the 2022 academic year. “Integrated History” mainly focuses on modern and contemporary history with three viewpoints: modernization, popularization and globalization. This study reviews the history of world expositions and discusses how the history of world expos is used as teaching and learning materials in new “Integrated History” classes.

**キーワード：**歴史総合、近現代史、万国博覧会、主題学習、主題的学習カリキュラム

**Keywords：**Integrated History, Modern and Contemporary History, World Expositions, Thematic Teaching and Learning

#### 1. はじめに

2018年3月に高等学校学習指導要領が告知され、2022年度から地理歴史科において新科目「歴史総合」が実施される。「歴史総合」は近現代史を中心とした日本史、世界史の融合科目であり、標準単位数2単位の共通必修科目として設定された。

「歴史総合」の特質や問題点について、多くの書籍や論稿において解説、指摘されている。例えば、米山（2019）は、「『歴史総合』の趣旨が従来の通史学習でなく、主題・テーマ学習であり、繰り返しの活動を通じて思考力・判断力・表現力等を習得することを意図した歴史を題材に技能を学ぶ科目である」と分析した。そのうえで「技能の獲得を優先した学習をおこなうならば、授業は歴史の知識と理解を保障しない『活動主義』『技能主義』に傾斜し、『歴史総合』は歴史を学ばず、歴史をツールとした技能習得の学習に陥る危険性がある」と警鐘を鳴らしている。今野（2019）は、「歴史総合」が「内容教科」（内容の習得を目的とする）であった地理歴史科が「資質育成教科」に変質

したとき、教員は改訂の方向性に沿う形で、自発的に教材を開発していこう」とも指摘している。

実施前に活発な議論が生まれている「歴史総合」であるが、学習指導要領の趣旨を踏まえるならば、暗記科目ではなく、生徒が現代社会においていかに歴史を活かせば良いか、いかに歴史と関われば良いかを学習する科目になる可能性があると予想される（中村、2021）。この点について二井（2019）は「歴史総合」が「生徒自身と歴史学習との間に何らかの関係性を構築することをめざしていることを象徴して」と指摘している。さらに、このことは本田（2003）が提唱する「学習レリバンス」に関連したものであると解釈した上で、「歴史総合」は、「歴史を生徒に“自分事”として捉えさせ、多様な実態にある生徒それぞれに学ぶ意味を実感させよう」とする科目になり得ると述べている。原田（2016）は、現代的な諸課題をカリキュラムのスコープに設定し、近代化・大衆化・グローバル化という歴史の転換に着目し、過去と現在をリンクしながら近現代史を探究する「歴史総合」の内容構成案を提起している。

本稿では、2022年度から実施される「歴史総合」の3つの観点「近代化」「大衆化」「グローバル化」に着目し、日本と世界を相互的な視野から考える近現代史の教材として19世紀中頃から世界各地で開催されている万国博覧会（以後万博）を取り上げていく。万博に注目した理由は、佐野（2020）の言葉を借りれば、万博は「世界を把握する方法」であり、各時代を映し出してきた世界的イベントであること、また万博は歴史的状況や当時の国がどのように自国をアピールし、お互いを評価していたのかを理解する重要な資料であるためである。世界の多くの国が集まり、自国の国力を誇示した万博は、その時代に到達した産業、技術、文化を見る空間であり、まさに「近代化」「大衆化」「グローバル化」を映し出すイベントといえよう。万博に関する書籍、研究論文等は国内外に多数存在するが、万博を歴史の教材として焦点をあてた論文等は、歴史授業の教材として第2回ロンドン万博に注目した研究（楠元，2017）、大阪万博が美術教育に与えた影響を論じた研究（山田，2017）など、あまり多く見当たらない。本稿では、平野（2014，2016）、暮沢（2018）、橋爪（2020，2021）などの書籍・論文等を参考にしながら、1851年の第1回ロンドン万博から170年以上にわたる万博の歴史から、「歴史総合」のカリキュラムを構想するための示唆を導いていきたい。

## 2. 『万博1.0』時代

平野（2014）は1851年に生まれて170年を超える万博の歴史を、分岐点を2つの世界大戦の間、1933年シカゴ万博から1939年ニューヨーク万博とし、それ以前を「モノを見せる博覧会」である『万博1.0』、それ以降を「世界観アピール型」を特徴とする『万博2.0』と区分している。

1851年イギリスの首都ロンドンで「全人類が現在までに到達した技術、産業、文化を示す」という主旨の下に、万博が世界で初めて開催された。第1回ロンドン万博の大成功に刺激され、1853年にはニューヨーク万博が開催、1855年にはパリ万博が開催された。パリでは19世紀中に、1855年を含めて1867年、1878年、1889年、1890年と5回開催された。1889年パリ万博ではエッフェル塔が建設された。フランス政府が全力で取り組んだ1900年パリ万博の入場者数は5,086万人となり、この記録はニューヨーク万博が1964年～65年と2年間、会期365日をかけて塗り替えるまで、半世紀以上にわたって首位の座にあった。1900年パリ万博

は、その華麗さと壮大さで、敬意を込めて『万博中の万博』と呼ばれている。

日本が初めて万博に参加したのは、1867年のパリ万博である。明治維新前年の動乱期にあって、江戸幕府、薩摩藩、佐賀藩が個別にブースを出展し、日本からは“3つの政府”が参加する事態となった。江戸幕府は和紙、日本刀、磁器、絹織物などの工芸品を展示し、浅草の商人清水卯三郎がプライベートで庭園ゾーンに出展し、自らの経営による柳橋芸者3人が接待する日本風の茶店が大変な人気となった。

明治政府が公式参加したのは、1873年に開催されたウィーン万国博覧会である。日本は白木の鳥居、神殿、神楽堂や反り橋のある日本庭園を造り、日本ブームを引き起こした。1893（明治26）年のシカゴ万博から各国政府が政府館を建設することになり、日本は平等院鳳凰堂を模した政府館を建設した。このように日本は日本独特の庭園や伝統的建築様式、日本趣味の強いデザインの製品を展示してきた。日本政府も海外諸国との交易推進、輸出産業の発展を目指して、万博への公式参加を表明して文明社会である西欧諸国の最新技術を得る一方、日本固有の文化、産業、国民性などを世界にアピールする時代に入ったのである。

## 3. 『万博2.0』時代のはじまり

20世紀に入ると、アメリカが新興国ながら国力を伸ばし、経済力、政治力ともに国際社会のリーダーとなっていくのに連動し、万博においても中心的な存在になっていった。その象徴は、ルイジアナ買収100年を記念するセントルイス万博（1904）であった。セントルイス万博は、44か国が参加し、会場はフィラデルフィア万博（1876）の4倍、シカゴ万博（1893）の2倍という史上最大の博覧会であった。会場には1,576の建物と全長21キロの鉄道も敷設され、入場者総数は約2,000万人、一日の平均入場者数は10万人以上を記録した。万博と平行して、アテネ、パリ大会に続くアメリカ国内初の第3回近代オリンピック大会も開催されていた。

「世界観アピール型」展示の萌芽となったのは、シカゴ市制施行100周年を記念したシカゴ万博（1933年～1934年）であった。シカゴの100年が産業革命以後の近代化100年と重なることから、「進歩の一世紀」がテーマとして設定された。シカゴ万博は1930年代のアメリカにおいて志向されていた未来像の反映であるだけでなく、未来像を来場者に向けて構築・提案す

る場でもあった。万博の中核的な展示会場である科学館では、数学・物理・化学・生物学・地学・医学・歯学・薬理学のセクションが設けられ、それぞれのセクションでは視覚に訴えるモノや仕掛けを中心とした展示がおこなわれていた。例えば数学では光電池を利用した計算機、物理では分子のモデル、医学では人間の体の仕組みが透けて見えるように作られた人体モデルといった具合である。同じ建物の中で、様々な科学の成果がどのように産業に役立っているかを示す展示がそこかしこに設けられていたので、来場者は現代の生活の利便性は科学によって支えられているという理解に至るよう誘導される仕掛けであった。

1939年にはアメリカ合衆国初代大統領ジョージ・ワシントンの就任150周年を記念して、「明日の世界の建設と平和」をテーマに、ニューヨーク万博が開催された。500年後に開封されるタイプカプセル、柱と円との建築構造の原理を示す巨大な三角の塔「トライロン」と巨大な球体「ペリスフィア」からなるモニュメントが象徴として正面に配置された。当時イギリス、フランスがドイツに宣戦布告して第二次世界大戦が始まったが、大西洋を隔てたアメリカは未だ平和であり、日本を含む64か国が参加した。出展するパビリオンの建築様式は大きさや色などの制限がなく自由であり、アメリカを代表する大企業を中心に個性的な建物が建築された。RCAはラジオ用の真空管のパビリオン、USスチールはステンレスの大ドーム、タイムカプセルが埋設されるウェスチングハウス館は逆円錐形であった。外国政府館も、ソ連館は円形劇場風、ポーランド館は外装を金色の一松風にした直方体の高塔、イタリア館は伝統と近代を組み合わせた建物で、高さ50メートルの高塔からの階段式の滝が流れ落とされた。

1937年のパリ万博は、ナチスによるパリ侵攻の3年前、第二次世界大戦勃発の2年前というタイミングでの開催であった。会場においては、エッフェル塔を挟んでスターリンのソ連館とヒトラーのドイツ館が、それぞれのイデオロギーをヴィジュアル化し対峙した。スペイン館では、ピカソが開幕直前に起きたゲルニカ空爆の惨劇を聞き、1か月足らずで完成させた歴史的大作「ゲルニカ」が展示された。1937年のパリ万博では各国が競って最新技術を披露することはなかったが、多様な夜間照明や「宣伝・広告」が初めて独立したパビリオンが設けられるなど、資本主義の発展段階に対する万博のあり方が示された。

#### 4. 『万博2.0』時代の頂点へ

2度の世界大戦で、今まで人類が経験したことのない被害を人々は目の当たりにした。そのような失敗を繰り返さないようにという強い意志が国際社会で共有され、万博は様々な国が共有する平和の祭典の場としての意味合いが強まった。新しい時代の万博では、核兵器開発などの科学技術が世界大戦での被害を大きくしたということに対する批判には答えず、科学技術こそが夢の未来を作り出すための有効な手段であることを人々に認識させる目的を持つようになった。取り扱うテーマが宇宙、原子力、電気など、人々の目に見えないものが多いため、映像などの技術を駆使する手段が展示にも取り入れられるようになっていった。『万博2.0』は1970年大阪万博で頂点を迎えるが、その大阪万博に大きな影響を与えたのは、ブリュッセル万博(1958)、ニューヨーク万博(1964年～1965年)、モントリオール万博(1967年)であった。

1958年、第二次世界大戦後初の万博はベルギー・ブリュッセルで開催された。テーマは進歩の中で失われていく人間性復活を採り上げ、「科学文明とヒューマニズム—より人間的な世界へのバランスシート」とした。シンボルとなったモニュメントは原子力時代にちなんで「アトミウム」と名付けられ会場中央の広場に建設された。「アトミウム」は原子核を1,500億倍に拡大した高さは103メートルあり、直径18メートルの球体9個をチューブで繋いだモニュメントであった。

1964年から1965年にかけて開催されたニューヨーク万博は、ケネディ大統領が暗殺され、ベトナム戦争介入の深刻化や公民権をめぐる人種問題が激化している時代であった。この博覧会は「理解を通じての平和」をテーマに掲げ、人類の平和を象徴する大地球儀「ユニスフェア」をモニュメントにして、楽観的な未来世界を人々に結束して見せた。ゼネラルモーターズの「ニュー・フューチャラマ」は、長さ230メートルの巨大なパビリオンで、観客は電動椅子に乗ったままで未来都市や月世界を体験し、音・光・色を作り出すスペクタクルを楽しんだ。またウォルト・ディズニーが最新技術による4つのアトラクションの演出を手掛けた。イリノイ館の「リンカーン氏のすばらしい時」、ゼネラルエレクトリック館の「プロGRESS・ランド」、フォード館の「マジック・スカイウェイ」、ペプシコーラ館の「イツ・ア・スモール・ワールド」であった。「リンカーン氏のすばらしい時」は、人間そっくりな皮膚を持つ「オーディオ・アニマトロニクス」



というロボットを使って、リンカーン大統領を蘇らせた。「プログレス・ランド」では、当時のゼネラルエレクトリック社の宣伝PR「進歩こそわれわれの最も重要な製品です」に呼応して名付けられたパビリオンで、円形ステージのまわりを観客席が回転していく舞台装置で構成され、19世紀末から近未来世界に至るアメリカの住宅と電気製品の変遷を描き出していた。「マジック・スカイウェイ」は、タイムトリップの世界を作り、人類の進化を疑似体験させるもので、観客をフォード社製のオープンカーに乗せて、地球の誕生から宇宙時代へ導くものであった。

1967年に開催されたモントリオール万博は、カナダ建国100年祭記念行事の一環として、62か国が参加し、メインテーマ「人間とその世界」は世界に「統一カナダ」をアピールすることを目的とした。メインテーマをもとに、各パビリオンはそれぞれサブテーマを付し、次元の高い博覧会の構成となった。会場の基本方針は、過去の万博のように主催国の展示と参加国の展示でゾーンを区別することをやめ、各地域の周辺に重要な展示を配置し、主要な展示館が一部に偏ることを避けるなど、展示館中心主義を貫いた。万博のテーマに沿ったモニュメントとして建てられたのは、イスラエル移民の若い建築家が設計した「アビタ67」であった。「アビタ67」は箱型のコンクリート製の住宅を158個不規則に積み重ねた、都市問題解決のための新しい集団住宅の提案であった。カナダ政府館は、高さ33メートルの逆ピラミッド型の建物で、変わった形の舞台と傾斜式回転椅子をもつ劇場や、水上に絵ガラス張りのケベック館も建てられた。展示館の中で注目されたのは西ドイツ館とアメリカ館であった。フライ・オッターが設計した西ドイツ館は、40メートルの8本のマストで支えられたテント構造であった。バックミンスター・フラ設計のアメリカ館は、直径70メートルに達するプラスチック張りの球体で、フラ・ドームとして知られている。またアメリカ館とソ連館が、セント・ローレンス川をはさんで向かい合い、両展示館を結んで「コスモス・ウォーク」と名付けられた橋が架けられるなど、東西陣営の大国を結び付けたカナダの巧みな演出もあった。

## 5. 『万博2.0』の完成

大阪・吹田の千里丘陵において1970年に開催された大阪万博は、日本で初めての万博となった。大阪万博は、高度経済成長を成し遂げ、経済大国となった日本

の象徴的なイベントともいえる。開催期間は1970年3月15日から9月13日の183日間、来場者数は6,421万8,770人、参加国・地域等の数は77であった。「人類の進歩と調和」をテーマとし、1964年の東京オリンピック以来の大型国家イベントとなった。1970年大阪万博の特徴は、前述したブリュッセル万博（1958）の科学文明とヒューマニズムの追求というテーマ性、ニューヨーク万博（1964～1965）でのウォルト・ディズニーによる最新技術を活用した演出に代表されるエンターテインメント性、モントリオール万博（1967）での世界的建築家を起用した従来の建築物とは異なるパビリオンの設置や未来都市の演出などが、うまく融合された結果といわれている。

### 5-1. テーマ「人類の進歩と調和」

1970年大阪万博のテーマ「人類の進歩と調和」作成にあたっては、日本の文化人類学のパイオニアである梅棹忠夫、社会学者の加藤秀俊、SF作家の小松左京などが自主研究会「万国博を考える会」を立ち上げ多角的に万博の検討をおこなった。この「万博を考える会」は、東京に対抗すべく経済界が主導した大阪への万博誘致や開催に向けての動きに対し、理念や構想面で大きな貢献をしていくことになる。結果として「万国博を考える会」は、基本理念の草案作成に深く関与し、テーマ委員会はその基本理念に基づき「人類の進歩と調和」というテーマを決定した。基本理念とテーマは、会場計画、パビリオンの建設と展示計画、デザイン計画、イベント企画などあらゆる面において参照された。

### 5-2. パビリオン

77か国・地域のパビリオンの中で、開催前から関心を集めていたのが、ホスト国である日本と冷戦時代の東西陣営の雄であるアメリカとソ連のパビリオンであった。この三か国のパビリオンは三大人気館であり、それぞれ330ヘクタールの会場の東端、南端、北端に配置された。

日本館の敷地面積は37,791平方メートルで、国土の1,000分の1にあたる会場内で最大級のパビリオンであった。公式シンボルマークを意識した、5つの円形ドームを桜の花びらのように配した日本館は縄文時代から現代までを対象とした「日本と日本人」をメインテーマに、5つの展示館には「むかし」「いま」「あす」のテーマが託された。全館をめぐる、日本がたどってきた歴史と未来の技術を学び、日本の国の理解

を深める工夫がされた。展示方法は、モントリオール万博日本館の反省を踏まえ、モノよりも映像や音響を通じたイメージによってテーマを訴えるという展示が多く採用された。

アメリカ館は、パビリオン内外の気圧に差を設けて、大空間とする宇宙工学を活用した空気膜構造が採用された。アメリカ館の内部は「10人の写真家展」、「アメリカ絵画展」、「スポーツ展」、「宇宙開発展」、「建築展」、「民芸展」、「ニューアート展」と7つの部門からなる展示がおこなわれた。その中で最大のスペースを占めていたのは「宇宙開発展」であった。「アポロ計画」の展示が中心で、アポロ8号の司令塔の実物展示、1969年人類がはじめて月面着陸をした「静かの海」の着陸地点模型、月着陸船の実物、第1回着陸の際に宇宙飛行士が月面に残してきたものと同一機械装置、そして「月の石」などが展示された。「月の石」はアメリカ館だけでなく大阪万博の大きな目玉となり、実物を見ようと人々が殺到し、入場まで最大4～5時間の待ち時間が発生したほどであった。

万博で一番高いパビリオンはソ連館であった。開催期間中の1970年4月22日は、ソ連の指導者V. Iレーニンの生誕100周年にあたったため、第1会場を「世界最初の社会主義国家の誕生」にあて、レーニンの生涯と活動の紹介のほか、文化・芸術や宇宙展示を中心とした科学技術展示を展開した。宇宙展示では、人類史上初の有人宇宙飛行に成功したユーリン・ガガーリンの肖像を飾り、ドッキングするソユーズやボストークなどが展示された。他にもレーザーや深海調査なども紹介し、ソ連の高い科学技術力を見せつけたのである。

一方、発展途上国には負担軽減策が講じられた。ユニット化した小展示館を組み合わせ、事務所やスタッフを共用する仕組みで、「インターナショナル・プレース」と名付けられた。77か国中29か国がこのスキームで出展した。

1964年～65年のニューヨーク万博、1967年のモントリオール万博では企業館がアミューズメント性の高い演出で人気を博したことから、1970年大阪万博では日本の民間企業は最先端の演出技術を駆使したパビリオンを建設していった。三菱、三井、住友などの旧財閥グループ、三和、富士などの銀行系列グループ、日立、東芝、松下などの企業グループ、日本自動車工業会や日本鉄鋼連盟などの業界団体、日本電信電話公社や日本専売公社などの特殊法人等、国内出展の参加企業・団体総数は1,040にのぼった。こどもたちの中で

人気が高かったのは「三菱未来館」と「日立グループ館」であった。三洋電機グループの「サンヨー館」では未来の家庭生活をイメージした提案が注目を集めた。特に流線形のカプセルに座っているだけで超音波の自動入浴できる「ウルトラソニック・バス」は「人間洗濯機」とも呼ばれ、人気を集めた。

岡本太郎が設計した「太陽の塔」は人間の尊厳と無限の進歩、発展を表現し、総合プロデューサー・丹下健三が設計した大屋根を貫く存在は、会場全体の象徴するモニュメントともなった。塔の内部には、生物の進化を示す系統樹を立体化した「生命の樹」が起立、292体の造形物が配置された。最下部にはアメーバー、爬虫類や哺乳類、恐竜などが枝の上に並び、最も上の枝には霊長類が配置された。塔の頂部には未来を表す「黄金の顔」、正面には現在を表す「太陽の顔」、背後には過去を表す「黒い太陽」がある。これは、テーマ館が「過去」「未来」「現在」を巡る構成であったことに加え、岡本が、人間の身体や精神は、いつでも人類の過去、現在、未来が一体となって輪廻していると考えていたためである。

## 6. 『万博2.0』の終焉

1970年の大阪万博に続く一般博は22年後の1992年、スペイン・セビリアで開催された。4,181万人が来場したが、内容面でのインパクトは大阪万博には遠く及ばないものであった。会場に立ち現れたのは典型的な万博の光景であり、大阪万博で見られた斬新なデザインや、未来の都市モデル構想のようなビジョンもなかった。セビリア万博で象徴的だったのは、東西陣営の盟主であるアメリカとソ連のプレゼンスの低下であった。1989年にベルリンの壁、1991年にソ連崩壊により70年以上続いた冷戦時代が終わりとなり、国家の威信をかけた戦いの場である万博は時代に追い越された印象が残るものとなった。

2000年には世紀と世紀をつなぐ万博として、ドイツのハノーバーにて「人・自然・技術」をテーマに開催された。世紀の節目の万博として期待されたが、4,000万人の目標に対して1,810万人しか来場せず、1,000億円の赤字を出す結果となった。

2005年には「自然の叡智」をテーマに「愛・地球博」愛知万博が開催された。人類が直面している地球的課題を克服し、持続的成長が可能な人類と自然が共生できる社会の方向性を提示するなど、従来型の産業博から脱する新しい環境博を目指したが、準備段階か

ら迷走を繰り返した。環境保護と市民参加をアピールしたが、あらかじめ目標入場者数を低く設定したおかげで、BIEから「成功」の評価を得たが、愛知万博の評価については、識者の間でも意見が分かれている。

2010年中国・上海万博のテーマは「より良い都市・より良い生活」で、会場面積は528ヘクタールと1904年のセントルイス万博の514ヘクタールを上回り、入場者数は7,300万人で大阪万博の6,412万人を抜き、万博の世界記録を更新した。出展国が自前の展示館を建設できる一般博の形式を採用したことから、会場には個性的なパビリオンが建てられた。経済成長著しい中国の市場価値を意識した出展が多く、近代的な進歩主義の時代に戻ったようだとの感想も聞かれた。大阪万博以降、万博はあらゆる面で力をドロップさせ、新しい価値を創出できていなかったが、途上国では万博は未だ通用するものであることを証明したのもであった。

2015年に開催されたイタリア・ミラノ万博は「地球に食料を、生命にエネルギーを」とした「食」をテーマとしたユニークな催しとなった。2020年には、中東・アフリカ地域で初の万博であるドバイ万博が開催予定であったが、2020年東京オリンピック・パラリンピック同様、新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催が1年延長され、開催期間は2021年10月1日から2022年3月31日となった。そして2025年には、大阪市此花区舞洲にて「大阪・関西万博」が開催される。

## おわりに

2019年11月22日、日本学術会議は、「歴史は本来、過去の営みから現在と未来の社会を考えるものである」と表現している。19世紀から20世紀にかけて、世界の多くの国が集まり、自国の国力を誇示し、その時代に到達した産業、技術、文化を見る空間であった万博は、まさに「文明の装置」であり、歴史的状況を理解する重要な資料であろう。その点では2022年度から実施される「歴史総合」の3つの観点「近代化」「大衆化」「グローバル化」のショーケースでもある。また21世紀に入り「地球的課題解決の場」となった万博は「現在と未来の社会を考える場」の役割を担っている。2025年開催予定の大阪・関西万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」と、2030年までに世界の課題を解決する国連の掲げるSDGs（持続可能な開発目標）をプラットフォームに、「地球課題解決の場」としてのSDGs達成の貢献を強く打ち出している。

博覧会は博物館と違い開催期間が決められている。実際、1970年大阪万博に関しては、建造物の多くは解体された。エキスポランド、エキスポタワー、万国博美術館、万国博ホールは閉幕後存続したが、2005年に降順次閉園・閉鎖されていった。太陽の塔、迎賓館、日本民藝館、EXPO'70パビリオンとなった鉄鋼館は現存している。世界を見れば、万博にとまって建造されたエッフェル塔（1889年パリ万博）、アトムウム（1958年ブリュッセル万博）、エキスポドーム67（1967年モントリオール万博）などの建築物が現在でも残っている。

これまでに開催された万博に関する多くの資料も保存されている。大阪万博会場跡地である大阪万博記念公園の敷地には、大阪万博の精神を受け継ぐ国立民族学博物館が1977年11月に開館した。その国立民族学博物館では、博物館、小中高校、そして日本国際理解教育学会が連携して、授業づくり支援、博物館教育活用支援、教員研修支援などの「博－学－学連携」をおこなっている（中牧・森茂・多田，2009）。大阪万博をしのぐ来場者を記録した2010年上海万博跡地には、2017年万博博物館（中国語では世博博物館）がオープンした。160年以上にわたる万博の歴史はヘリテージ（過去からの遺産）として展示し、上海万博はレガシー（未来への遺産）と展示されているのは興味深いところである。

万博を「歴史」として学ぶ上で、上述した現在も残る建造物の見学や資料の分析は重要である。それ以上に重要なのは万博を実際に体験した人々との「想い」の共有ではないだろうか。筆者は大阪万博当時、小学校2年生であった。万博会場のあった千里丘陵に近い池田市で生まれ育ったため、会期中に10回ほど出向き、100近くのパビリオンに入館した記憶がある。小学校2年生の筆者にとって、大阪万博は「世界」との接点を直接的に感じ、身体に取り込むことができた貴重な経験であった。

万博は時代とともに、そのあり方を変えつつも、世紀を跨ぎつつ、内外において「文明の装置」としての役割は続いていくものと思われる。1970年大阪万博を体験した研究者として、「いま」を生きることもたちに、自らが経験した「世界」と「未来」の接点としての万博を理解してもらいたいと考える。「いま」のこともたちが夢を抱くようなきっかけに2025年の万博はなるのであろうか。2025年の万博で、何に出会い、何を見て、何を感じ、そして何を学ぶのであろうか。また過去の万博と2025年万博をどのようにつなげていく



のであろうか。1970年大阪万博で夢を見た世代として、2022年度の「歴史総合」導入に合わせて、万博を活用した授業の提案を、2025年万博開催を見据えながら継続的に取り組んでいきたいと思っている。

#### 引用・参考文献

大阪大学21世紀懐徳堂（編）『なつかしき未来「大阪万博」』創元社。

楠元町子（2017）「万国博覧会を活用した歴史の授業－1862年第2回ロンドン万国博覧会を教材として」『愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇』，第42号，pp.27-45。

暮沢剛巳（2018）『オリンピックと万博－巨大イベントのデザイン史』筑摩書房。

今野日出晴（2019）「内面化される「規範」と動員される「主体」」『歴史評論』，第828号，pp.5-13。

佐野真由子（編）『万博学 万博博覧会という，世界を把握する方法』思文閣出版。

豊川斎嚇（2019）「日本万国博覧会会場設計プロセスと共同設計に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』，第84巻，第763号，pp.1993-2003。

中牧弘允，森茂岳雄，多田孝志（編）（2009）『学校と博物館でつくる国際理解教育』明石書店。

中村洋樹（2021）「生徒と歴史教育との学習レリバンس構築のための主題的歴史カリキュラムの構成－“Teaching U.S. History Thematically”を手がかりにして－」『四天王寺大学紀要』，第69号，pp.85-105。

二井正浩（2019）「高等学校地理歴史科「歴史総合」とカリキュラムマネジメント－歴史学習と「私たち」－」社会系教科教育学会編『社会系教科教育学会研究のブレイクスルー－理論と実践の往還をめざして－』風間書房，pp.56-66。

日本学術会議史学委員会・中高大歴史教育に関する分科会（2019）『歴史的思考力を育てる大学入試のありかたについて』

橋爪紳也（2020）『大阪万博の戦後史－EXPO '70から2025年万博へ』創元社。

橋爪紳也（2021）『博覧会の世紀1851-1970』青幻社。

原田智仁（2016）「資質・能力育成のための歴史教育の内容構成論－高校の新設科目「歴史総合」を手がかりに－」『日本教科教育学会誌』，第39巻，第3号，pp.73-78。

平野暁臣（2014）『大阪万博 20世紀が夢見た21世紀』小学館クリエイティブ。

平野暁臣（2016）『万博の歴史』小学館クリエイティブ。

藤原健剛（2019）「「歴史総合」実施に向けての期待と課題－「歴史総合」の理想の形にするために」『甲南大学教職教育センター年報・研究報告書』pp.13-22。

本田由紀（2003）「学習レリバン스의構造・背景・帰結」『学校臨床研究』，第2巻，第2号，pp.25-36。

山田一美（2017）「大阪万博以降の美術ジャンル・主題をめぐる論点と図画工作・美術教育内容への影響」『美術教育学研究』，第49号，pp.441-448。

米山宏史（2019）「学習指導要領の改訂と高校「社会科学」教育の課題」『歴史学研究』，979号，pp.36-44。